



■ ホームページスマホ対応



スマホ画面例

都草のホームページ（以下 HP）は、会発足 2 年後の 2009 年 8 月 30 日に運用を開始しました。そして 2014 年に全面改修を行い今に至っています。HP の画面は、パソコンで見るのに合わせて横長のデザインになっています。縦長画面のスマホでも閲覧できますが、画面を左右にスクロールしないと全体を見ることができず、不便でした。

ところで、国内のスマホの普及率は 2023 年には 96.3%と大多数の人が持っている状況になっています。HP の閲覧状況を調べたところ、数年前から閲覧者の半数ほどがスマホになっており、対応が必要になっていました。このため、HP を改修して、スマホにも対応することにしました。新しい HP は、横長のパソコン用画面と縦長のスマホ用画面の両方を用意、それぞれで見やすい工夫をしています。また、これまで主催事業の活動を報告する「活動内容」を上段に配置していましたが、募集や予定など、これから行う事業の案内を先に表示するようレイアウトも変更します。

さらに、京都通模擬試験、都草講演会の HP からの申込みを拡大して、京都検定直前演習、京都御苑案内 10 周年記念講演会（11 月予定）、歴史探訪会などの主催行事も HP から申し込めるようにします。下段の「会員からの投稿」欄を、上段に配置して「会員広場」と改めます。個人の活動でも結構ですので、会員の皆様にご紹介したいものがありましたら、事務局までお寄せ下さい。新しい HP は 8 月中に運用開始する予定です。ぜひご活用下さい。

都草ホームページ URL : <https://www.miyakogusa.com/> （副理事長 須田 信夫）

■ 都草講演会：京都府立植物園 100 年の歩みと、進化を知ると植物が面白い



大正 13（1924）年 1 月 1 日に開園した京都府立植物園は今年で 100 年になりました。園長の戸部博先生は京大名誉教授で、元日本植物学会会長です。今回は京都府立植物園の歴史と植物の進化の歩み（歴史）を二部に分けて講演いただきました。

第一部はこの地になぜ植物園ができたか？ 今に至る 100 年の歴史とこれからの 100 年に向けた新たな取り組みを紹介。当初この地は大正天皇の「大典記念京都大博覧会」の開催予定地でしたが、諸事情により中止となりました。その後三井家からの寄付を基に当時の大森鍾一京都府知事の尽力で日本初の「大典記念京都植物園」が開園されました。この時に協議を重ねた一人が建築家の武田五一で、彼の欧米留学の知見が反映されたそうです。

第二次大戦時は園内に菜園が作られ、戦後は 12 年間連合軍に接収されました。そのあと昭和 36（1961）年から再公開され、現在も年間来場数は国内トップクラスとなっています。

これからの 100 年に向けては、京都植物誌の発行、学習拠点・標本庫の整備などを進めていきたいとのことでした。

第二部では、およそ 5 億年前に上陸した植物がどう進化してきたかを、化石から探る道筋を解説していただきました。およそ 1 億年ごとにコケ植物→シダ植物→裸子植物→被子植物と大きく進化してきました。「進化が分かると植物が面白い」ということの最後に、葵祭でおなじみの「フタバアオイ」が日本の固有種ではなく、中国の種に近いことを教えてくださいました。身近な「フタバアオイ」がいつかは消えるかも？ ということ専門的な進化の話で締めくくられました。（理事 相場 まり子）

■ 北観音山曳き手ボランティア



私が北観音山の作事方をさせていただいているご縁で、都草会員の今年の北観音山曳き手ボランティアへの参加が実現いたしました。事故や怪我もなく無事に終わることができて何よりでした。参加された会員の感想をご紹介します。(理事 八木澤 哲雄)

・曳き手の体験も前から5番目で、辻回しを超真近で見られ、技の素晴らしさ、手際の良さに感心しました。(谷川 清三)

・猛暑の中、体力・気力に正直不安がありましたが、神事への参加で改めてご町内の結束と協力は凄いと感じました。最後の雷雨はきっと神の喜びだと感じました。(野津 隆)

・たくさんのお見物客に拍手をいただいた時は、京都の伝統行事の一端を担っている、との思いで、感動と誇りが胸にこみ上げてきました。(松井 浩治)

・曳き手を担当して祇園祭の魅力を肌で感じることができました。(吉野 克行)

・今回、前祭で四条傘鉾の曳き手、後祭は北観音山の曳き手に生まれて初めて参加し、大観衆に歓迎され喜ばれるという貴重な体験ができました。(北澤 正敏)

・巡行を終えて雷雨の中、六角町に帰ってきた時、町内の皆さんに大きな拍手で迎えていただき全身が震えるほど感動しました。(富永 正治)

・日差しが弱くても汗が止まらず、徐々に握力が弱くなり、足の裏も痛くなってきて・・・大変でしたが来年も是非曳きたいです！(増田 好彦)

・最後の新町通は雷鳴が轟く土砂降りの中、声を出し綱を曳きました。疫病神が空に去っていくように感じられ、思い出深かったです。(平野 圭祐)

・初めての曳き手の体験はいい思い出になりました。多くの方に支えられた祭の運営を少し垣間見た感じです。達成感に浸っています。(川村 剛)

■ 映像プロジェクトの取材をして



映像プロジェクト第8弾「京の伝統菓子」を公開しました。様々な伝統と文化を育んできたこの都は、菓子においても例外ではなく、多くの技と味を現在に受け継いでいます。茶道や和歌、能・狂言など、そして何より社寺の影響を切り離して考えるわけにはいきません。神社への供物から、多くの門前菓子が発展していきました。今回はそのうちの3軒をご紹介します。

京都の老舗番付で常に東の横綱に挙げられ、千年の歴史を持つ今宮神社門前の「一文字屋和輔(一和)」。供される「阿ぶり餅」の竹串は、削るだけでも3年の修行が必要で、昔はその竹串も、祭礼の時の斎竹(いみだけ)を使用していたこと。

御霊信仰で知られる上御霊神社門前の「水田玉雲堂」。昔は神社の境内に店があり、明治維新までは皇室に皇子が誕生すると、必ず使いの者が参詣し「唐板(からいた)」を持ち帰ったということ。

古来より火伏の神として信仰を集める愛宕神社。その一の鳥居前にある「平野屋」。ここで出される「志んこ」の形状は、愛宕山の「つづら折り」の山道を表しているといわれる。昔はこの地域の多くの家で作っていたもので、各家によって少しずつ味や形が違っており、多くの茶店が「志んこ」を出していたこと。

これらのお話も興味が尽きることなく、時間が経つのを忘れるほどでした。ただ、どのお店の女将さんも、氏子や参詣される方々をととても大切に思われ、インバウンドによって、この大切な方々をお断りしなければならないという状況を嘆いておられました。この思いこそが、連綿と何百年と続けてこられた「証」と感じられた今回の取材でした。(監事 西野 嘉一)